

本盆地の水田地帯で田畦や水路沿いに爆発的に繁殖したことがあった（植研で既報）。その際は、当地方の水辺の植生は今後どう変ってしまうのかと少なからず気にかかったものであるが、それは杞憂であった。その後はむしろ衰退して植生は落ちつきを取り戻して今に至っている。

アレチウリ（ウリ科）が、中北信の川沿いの植生を広く被い、ヤナギ類やニセアカシアの梢までもよじ昇った異変は'80年であったが、翌年はめっきり衰えて、今は各地散生の程度となった。その他の例も多い。こうした例を想起するとき、イヌクイモも、今後水辺に據って周囲の植生とまた人間社会からの干渉とも調和を保ちながら、全県各地に姿を見せるようになるだろう。

今後広布の予想されるのは、東北信ではまず平野部の千曲川筋であろう。松本盆地でも平野部には北アルプスから急下する高瀬川、梓川、その他氾らん原を広く持つものが多く、繁殖が進むかも知れない。諏訪湖周辺から伊那地方へ天竜川沿いも伸びるであろう。しかし、千曲川では上流部下流部共に河床の乏しい峡谷である。この点天竜川の下流・木曽川も同じで、これ等はイヌクイモにとっては環境条件の不足の外、人間社会との接触の不足もあって、大群落が発達し得るか疑問である。

障害となる事態も予想される。河床に木本類が茂る時期になると勢いは殺されるだろう。最近多くなったクロバナエンジュにも悩まされるだろうし、その他ヤナギの類は年毎に被覆を増す。強い相手はニセアカシア、この植物は成長の一時期には草本の進入を全く許さぬほどに茂る。しかも、こうした雑木は今は利用の目的で伐採されることはない。

しかし、年と共に進む上流の植生破壊は洪水を烈しくする。この時一気に流されれば、群落遷移は振

り出しに戻ることになる。植生が一掃されると、すかさず、一年草を主とする初生群落が出現する。忍耐を続けて命脈を保って来た帰化植物は、一斉にこの時復活することになる。その群落も遷移が進んで、密群落に変るにつれて、堤防沿いに流失を免れた持続群落の中に残ったイヌクイモは、高茎草本特にツルヨシとは親近の関係を保ちながら、新しい力を蘇らせて躍進を始めることになるだろう。

しかし、平坦地を離れて高位置にある開拓地、観光・スポーツ施設地等は一般に帰化植物が入り易いものであるが、イヌクイモが果して入り得るものか。例えば、八ヶ岳山麓、志賀高原、菅平、霧ヶ峰高原等、水流に乏しい台地は注目する必要があるだろう。

また、溪谷の奥の温泉地などは、水には近いとは言え標高の高い例が多い。このように、台地とは環境条件を異にする地の監視も忘れてはなるまい。

VI 終 り に

心残りなのは、軽井沢から碓氷峠を越え群馬県へのコースの巡検が、時季すでに遅く、花も葉も共に凋落して判明し難く、途中で断然したことである。

また、軽井沢と富士見にイヌクイモの存在が報ぜられているが（横内：信濃植物誌）、これについては、未だ確め得ないでいる（富士見のものは、横内文人氏によると、南流する沢近くに数年前見たもので、その後出水で流失した由）。

記し終って、調査の不備と不足は自分自身感ずるのであるが、突然に、この信州の野に引かれてか、入って来てすすくと育ち、明るく川辺を飾っているイヌクイモ、その生態のあらまはしは知ることができたものと思う。

拙い報文について、各位の御知見を伺うことができれば幸いである。（78才、信濃路草植の旅を終えて。）

〔植物ニュース〕78. シロタエヒマワリ *Helianthus argophyllus* Torrey et Gray

松本市すすき川の河床に5m×10mくらいの範囲で、雑草の中に多生しているのに気付いたのは、'84年10月14日、花期は終り頃であった。

花は同属のヒマワリを小形にしたようで径は凡そ7cm、茎葉ともに綿毛に被われて白い。冠毛は短く、そう果は遠方へ飛ばないだろうから、当分はこの付近に群落が局限されて持続するかも知れない。

北米原産の大型一年草の園芸植物（長田帰化植物図鑑による）。
（浅川富雄）

79. コシカギク（オロシャギク） *Matricaria matricarioides* Porter

同属のシカギクに似て小形の1年草、葉は2回羽状にさけて、その裂片は線形、花床が円錐形に高くなり、舌状花冠はない。さきに志賀高原で標高1,650mの路辺で見かけたが、'84年9月、再度訪れて定着していることを知った。

その生態は、北海道によく似て、路辺の踏地の疎群落の構成種となっている。北欧では都市の路辺にふつうというから、寒地に適応した帰化植物であろう。諏訪、戸隠にあると報ぜられているが、その生態を知り度い。
（浅川富雄）